

櫛伝馬への思い

現在のように道路が整備されておらず、交通手段が海上輸送の帆船に頼っていた時代、下蒲刈町三之瀬の櫛伝馬船は、救助艇として、下蒲刈周辺の海難事故を防ぐため、大正十三年秋、地元の青年団員らが自らの資金で建造し、翌年一月進水したものです。以来、昭和十八年頃まで下蒲刈周辺で発生した船舶の遭難事故の時には、この櫛伝馬船が、人命救助や船体の保全に努め、また平時においても海難事故防止に活躍していました。また、戦時中は出征兵士を激励のために、櫛伝馬船に幟を立て、にぎやかに漕ぎ出し、兵士を見送る勇壮な行事を行ったり、時には団員どうしの連帯感を深めるため、宮島、柏島に遠洋航路講習を開催するなど「救助船」という呼び名で、多くの人々から親しまれ、厚い信頼を得ていました。

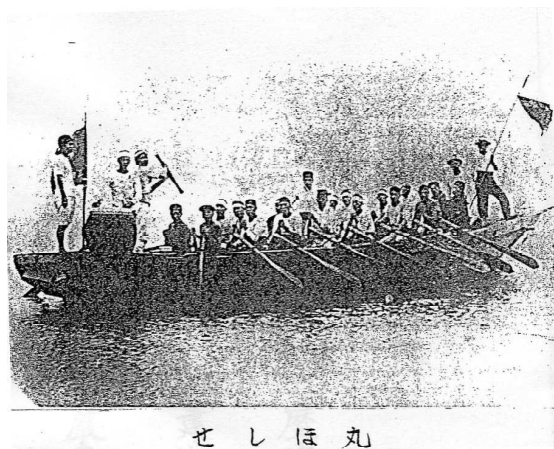
しかし終戦後、しばらくの間、住吉川に係留されていましたが、いつ知れず姿を消してしまいました。



もう、櫛伝馬船は救助船として使う時代ではなかったのですが、その後、この伝統ある櫛伝馬船を復元し、先人達の業績をしのび、下蒲刈町で培われた木造船の建造技術を次の世代に伝えるためにも櫛伝馬船を建造してはという機運が住民たちの間に高まってきました。現在、地元中学生に櫛伝馬の指導されている船田正治さんもその一人です。そこで、昭和五十七年、三之瀬文化・郷土芸能保存会では、町長に櫛伝馬船の復元について協力をお願いしました。町長はその趣旨に賛成され、昭和五十七年九月十四日、着工の運びとなり、昭和五十八年二月二十七日、無事進水式を迎えることができました。

復元された櫛伝馬船は、戦前の『せしほ丸』の名前にちなんで、『第二せしお』と名付けられ、現在では、ビーチフェスタや朝鮮通信使再現行列など地域の行事ではかかせないものとなっています。

では、復元当初から、『第二せしお』は、このような活用をされていたのでしょうか。当時の様子を船田正治さんが振り返ります。



私たちは、權伝馬船の復元を、大いに喜びました。と同時に不安な気持ちも生じました。それは、復元された權伝馬船を、今後どのように活用していくかでした。先人達の業績を忍ぶために、展示をしていくこと、これも確かに重要なことです。しかし、それだけですませて良いものだろうか。何か大切なものが欠けているような気がする。そんな気持ちがぬぐい去れませんでした。そんなとき、古い記録を調べてみると、

今から七十八年前の昭和七年七月、遠洋航路講

習も兼ね、当時の『せしほ丸』で二日をかけて宮島まで漕いで行き、管弦祭を見物して帰ってきたという記録があることが分かりました。

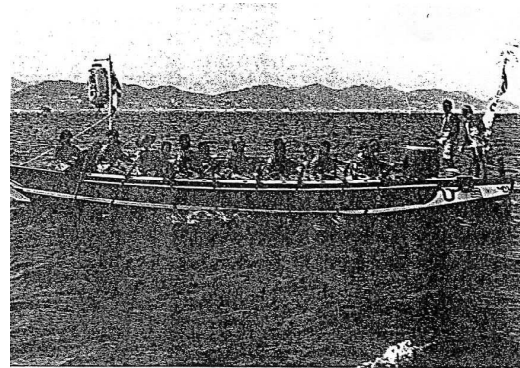
（これだ。）と思いました。私たちも、復元した『第二せしお』で先人達のように宮島に漕いで行こうと。かくして、『せしほ丸』の宮島参拝から約五十年後の昭和五十八年七月、『第二せしお』も、宮島までの四十五キロメートル、潮の流れや満ち引きを考えながら一日で漕いでいきました。」



平成10年9月第九回全国豊かな海づくり大会

その後、『第二せしお』は、単なる展示物としてではなく、様々な地域の行事の中で活躍していきます。平成元年九月に行われた第九回全国豊かな海づくり大会では、地元、下蒲刈中学校の生徒たちが、『第二せしお』に乗船し、權伝馬の公開演技を行いました。そして、それがもとなり、代々、下蒲刈中学校の生徒たちが、地域の行事であるビーチフェスタで、毎年、權伝馬披露を行っています。かつて、先人達が宮島に權伝馬船を漕いでいった技が、先輩たちから後輩へ脈々と受け継がれています。

長年、生徒の指導にあたってこられた船田正治さんは、おっしゃいます。とにかく、『第二せしお』を単なる展示物にしてはいけなと思います。先人達の業績をしのぶだけではなく、その心意気を継承していかなければなりません。そのためには、なんとしても動かさなければなりません。動かすこと、そして自分たちが、実際に操ってみることが郷土の文化や伝統を受け継いでいくことに繋がるのではないのでしょうか。」



昭和58.7.25 厳島神社参拝 広湾沖